読・書・漫・遊 ㊼

愛・蔵・秘・蔵・こ・の・3・冊

3books

人それぞれに本の読み方はあるだろう。
必要に迫られる読書、楽しく心に潤いを与えてくれる読書……
企業人にとっての読書の存在とは。

◎今月の選者
黒川 清
日本学術会議・会長

『名誉と順応　サムライ精神の歴史社会学』
（池上英子著、NTT出版）
●
『敗北を抱きしめて』（上・下）
（ジョン・ダワー著、岩波書店）
●
『日本の禍機』
（朝河貫一著、講談社学術文庫）

リーダーに不可欠な歴史観、世界観、志

明治維新前後から日露戦争までの間には、自分たちの力で国を立ち上げる、志の高い、命をかけた、歴史観と世界観のあるエリート、リーダーたちが出た。しかし戦後の日本は、米国の占領と冷戦構造という2つの外的条件の枠組みに勤勉な日本人の性格もあいまって、うまく経済成長をはたしたにすぎない。個性的で生き生きとした人がリーダーとならないシステムを構築してきたのだ。今やこの外的条件が崩壊し、ここにきてエリート論、リーダー論が喧しい。私は、エリート、リーダーに求められるのは、志の高さ、潔さ、歴史観、国際史観と国民への思いに尽きると考えている。

池上英子氏の『名誉と順応』は95年に米国にて英語で出版され、ベネディクトの『菊と刀』を超える、日本人の価値観と精神構造とその歴史的背景を分析した大作である。武士支配の1000年余、徳川鎖国政策250年の社会の安定と、その間の武家社会の変貌を通して、ヨーロッパの騎士道とはまた違う独特な「お家と組織――会社」、儒学の「忠と孝」の解釈、「個人と組織」等への考え方、ひいては「日本の常識」の形成過程をひもといてくれる。

これらの「日本の常識」が、この5年間に約30%増えた自殺が主に40～60代男性によるものであること、「過労死」という英語にもなっている日本に特有な行動を生んだこと、官僚の「天下り」という言葉が「カッコ」なしで大新聞に日常的に使われることへ、疑問さえも湧かさせないなど、特異な日本社会の根底に流れているのではないか。

話題の書にジョン・ダワーMIT教授の『敗北を抱きしめて』がある。米国占領下の日本についての書はいくつもあるが、このような優れた、バランスの取れた学術書が、日本通とはいえ米国の学者によって著されるのはちょっとさびしい。終戦の混乱期にあってマッカーサーが来るまでの2週間に、日本の将来を考えて命がけの行動を取ったリーダーが一人もいなかったことも指摘している。多くの軍資金は行方不明となり、徴発された貴金属もほとんどがうやむやになったという。今の日本の不良債権や財政状況問題にも似ているところがあると感じるのは私だけではあるまい。

エリート、リーダーは誰も責任をとらない、国民は知らない間に被害者になっているのである。今の世界的な情報の時代にまさかとは思うが、同じようなことが起こらなければよいのだが。この点では、野中郁次郎らの『失敗の本質』、猪瀬直樹の『日本国の研究』と『道路の権力』、アレックス・カーの『犬と鬼』等を志あるエリート、リーダーたちが熟読し、責任ある行動をとってほしいものであるが。

司馬遼太郎『坂の上の雲』の100年前、日露戦争で奇跡的勝利を収めた日本を陰で支えた立派な日本の学者がいる。朝河貫一氏である。明治6年生まれ、東京専門学校（後の早大）、ダートマス大卒、エール大学院に学び、エール大教授。中世日本とヨーロッパの荘園研究等で高い評価を受ける。日本海海戦前の1904年、日露衝突について政治、軍事、経済面での詳細なデータ分析を加えて、日本の「正当性Legitimacy」を示す英文論文を発表、英米の支援の基盤形成に貢献した。ポーツマス条約にもオブザーバーとして参加。

その後、彼としては唯一の日本語の本『日本の禍機』を1909年に出版。日本人に読んでもらうためにである。日露戦争勝利後の日本の満州での行動を、これも政治、軍事、経済面を分析してデータで示し、ルーズベルト大統領の政策と米国の国民性、太平洋を巡る国際政治の動向と展開等を解説し、満州での日本の行動には正当性のないこと、そして政策転換を切々と訴え、このままでは将来的に中国の恨みを買い、米国と衝突して負けると予測している。政府とか企業と関係なく、独立した個人の立場で米国に長くいるからこそ外からの日本が見えるのであり、国内ではなかなか見えないかもしれないが、と必死に訴えている。心を打たれる。

今の日本の状況も、根本的には同じではないか。しかし今の日本のエリート、リーダーに「Noblesse Oblige」を求めるのは所詮無理だろうか。選んだ3冊は、偶然だが日本をよく知り、外から日本を見られる人たちのものになった。

●『名誉と順応　サムライ精神の歴史社会学』（池上英子著、NTT出版）●『敗北を抱きしめて』（上・下）（ジョン・ダワー著、岩波書店）●『日本の禍機』（朝河貫一著、講談社学術文庫）
※『敗北を抱きしめて』は04年1月30日に増補版が出版予定（写真は旧版）